

「断り」行為において好感と不快感を決定する要因は何か —『スピーチ・レベル』と『方略』の二つの方策から—

What are the factors determining positive and negative impressions upon acts of "Refusal"?
- Considering "Speech Level" and "Semantic Formulae" -

村井 卷子
MURAI Makiko

An investigation was carried out into how refusal behavior is interpreted, focusing on "Speech Level" and "Semantic Formulae", and included the following two points.

A: Do the strategies used to give a positive impression differ based on situation (invitation, request)?

B: Do the strategies used to give a positive impression differ based on interpersonal relations?

The results of the investigation showed that strategies used to give a positive impression differ based on interpersonal relations (B). In the case of hierarchical relations, "Speech Level" has a greater influence than "Semantic Formulae". Where the "Speech Level" is the desu/masu form, the degree of positive feeling is heightened. In the case of proximal/distant relations, "Speech Level" does not have a significant influence but, where the "Semantic Formulae" of "Apology" or "Reason" are lacking, the degree of negative feeling is heightened. Regarding situation (A), the results showed that "Speech Level" and "Semantic Formulae" do not influence impressions.

1. はじめに

「断る」という行為は基本的にネガティブであり、自分が断る立場に立ったときには、どのように説明あるいは言い訳をしようかということに関心が行くのではないだろうか。それは、「断り」行為は相手の希望や要望に添えない意思の表明であるため、断る相手に不快感を与えたり、人間関係を損なう可能性が生じるからであろう。従って、断り手は断る意思を明確に表明しつつ、人間関係を維持するための方策を考えなければならないといえる。

「断り」行為については、すでに多くの研究がなされている。断り文の内容を謝罪や理由の説明など機能別に分類する『方略』に関する研究や、相手によって言葉遣いを変える『スピーチ・

レベル』に関する研究、会話分析や談話分析などの観点からの研究も盛んである。その中でも特に、『方略』や『スピーチ・レベル』などの方策についての研究は、これまでさまざまな形で取り上げられてきた。また近年、それらの知見をもとに、外国語と比較分析した異文化間コミュニケーションの視点を持つ研究も広範囲になされている。

しかし、「断り」行為において、断り手が相手の態度や状況を予測して取る方策が、対人関係や勧誘・依頼などの場面においてどのように有効であるのか、またどのような効果を持っているのかはほとんど検証されていないようである。本稿はこの点に注目し、調査をおこなったものである。

本調査では、断り手が取る方策としての『方略』と『スピーチ・レベル』を取り上げた。『方略』は断り文を機能の面から分析し、『スピーチ・レベル』は断り文を待遇表現の面から分析する。断り手は、相手との人間関係を考慮しながら『方略』と『スピーチ・レベル』を瞬時に決定し、双方を組み合わせて断り方を決定する。しかし先行研究では、『方略』および『スピーチ・レベル』における個々の知見は得られてはいるが、両者の組み合わせがどのように断られる側に評価されているのかについては、まだ目立った実績はないものと思われる。また、『方略』と『スピーチ・レベル』のどちらが「断り」行為に影響を与えるのかについてもわからない。本研究では、この両者がどのように複合的に影響するのかについて断られる側の立場に立ち、「相手に好感を与える断り方とはどういうものか」という視点から調査をおこなった。本調査では、以下の二点について分析を試みる。

- A 相手に好感を与える方策は、場面(勧誘・依頼)によって変わるのかどうか
- B 相手に好感を与える方策は、対人関係によって変わるのかどうか

2. 先行研究

「断り」行為において、『方略』や『スピーチ・レベル』を扱った研究には次のようなものがある。

『方略』については、先に述べたように多くの知見が得られている。藤森(1994a, 1994b)は、意味公式^{1(註)}という概念を用いて断り文を機能別に分析している。藤森は、「断り」行為は post-event^{2(註)}であり、相手の意向に添えない意思の表明であるとする。「断り」行為は常に不快状況を伴うものであり、対人関係の不均衡が生じると指摘し、「修復作業(remedial work)」^{3(註)}(Goffman 1971)の観点から分析を試みた。分析は意味公式の発現順序、発話連続数、意味公式「詫び」と「弁明」の使用状況からおこなわれている。藤森によれば、日本人が「断り」の発話行為に用いる二大関係修復表現は詫びと理由の表明である。対象者が上下・親疎のいずれの関係においても詫び表現が文頭に来る場合が多く、特に目上の者に対しては多用すると述べている(藤森 1994b:15)。村井(1998)は、日本人とドイツ人の「断り」行為を同じく意味公式を用いて比較・分析している。^{4(註)}日本人の「断り」行為においては、藤森と同じく詫びと理由の表明、続いて直接的な断りの意思を示す「だめだ」や「できない」などの不可の表明が多数を占め、この三

つの要素が三大意味公式をなしている(村井1998:205-208)。詫びについては、自分より立場が上の相手に対しては詫び表現を多用し、場合によっては一度の断りについて複数回使用する。それに対して、親しい相手に対しては詫び表現はあまり使用されないという結果が報告されている(村井1998:217-219)。

『スピーチ・レベル』についてもさまざまな角度から研究がなされている。村井(2001)は、「断り」行為において、上下・親疎関係にある相手からどのような断られ方をしたとき不愉快になるかについてアンケート調査をおこなっている。上下関係では後輩、親疎関係では同級生や親しい友人を断る側とし、どのように断られた場合に受け手は不愉快さを感じるかを5段階評定で選択してもらっている。断る側が、後輩(上下関係)の場合は「デス・マス」体を使用して断る一方、親しい友人や同級生(親疎関係)の場合は「ダ」体を使用し、文末にネやヨなどの終助詞をつけ加えたり、ノダ文を使用して断る。それに対して断られる側の反応は、後輩(上下関係)から「デス・マス」体で断られる場合は不愉快さを感じることはほとんどないが、親しい友人や同級生(親疎関係)から断られる場合は、相手の使用する文体に対して不愉快さを感じる事がときおり見られた(村井 2001:251-254)。これは上下関係の場合は、断る側も断られる側も敬語表現という規範のもとに行動することから不愉快さを感じない(感じさせない)のに対して、親疎関係の場合、規範が明確ではなく、相手とのお互いの心的距離の取り方にずれが生じるためだと思われる。また相手との心的距離が必ずしもはっきりしない場合は、文体は丁寧度の高い方を選択するとともに、ネやヨなどの終助詞を適宜使用することが賢明であることが示唆された。元(2003)は、「断り」行為におけるノダ文をポライトネスの観点から分析している。元は質問紙調査をおこない、ある場面について被験者に「ノダ」文と「行ケナイ」文および「行カナイ」文の印象を「ポライトネス度を測定する尺度」に基づいて評定してもらった。質問紙の文は「その日は用事がありますので、行けない(接続助詞ノデ+「行ケナイ」文)」、「その日は用事があるから、行かない(接続助詞カラ+「行カナイ」文)」などである。その結果、友人に対する場面でのポライトネス度について、「行ケナイ+ノダ」文と「行ケナイ」文は「行カナイ」文に比較して配慮度、間接度、親近度、改まり度が高いので、この二つの表現はポライトであると考えられる、また「行ケナイ+ノダ」文は「行ケナイ」文に比較して、さらにポライトである度合いが高い表現であると結論づけている(元 2003:15-17)。これは、ノダ文が親近感を持つ相手に対して使用する表現形態として評価されているということであろう。

3. 調査

3.1 方法

調査は、2005年1月～5月に立教大学および筑波大学の学生を対象におこなった(男子60名、女子96名、年齢18～24歳)。

アンケートは次のように設定した。まず、場面は勧誘・依頼の2場面とし、対象者は上下および親疎関係にある相手で、上下関係では「後輩」を、親疎関係では「親しい友人」を断る側とした。設問は、各場面において、『方略』と『スピーチ・レベル』を組み合わせた断り文を提示した。

方策は次のように設定した。

まず、『方略』は先行研究から得られた知見より、必要不可欠な『方略』として謝罪のことはを述べる〔詫び〕、断りの理由を述べる〔理由〕、明確な断りの意思表示である〔不可〕を抽出した。〔詫び〕は遺憾の表明を表し、「ごめんなさい」、「ごめん」、「すみません」などがある。〔理由〕は断りの具体的な説明であり、例としては、「お金が苦しい」、「時間がない」などがある。〔不可〕は直接的な断りである。例としては、「買えないんです」、「買えない」などがあげられる(表1)。

表1 『方略』の分類

方略	機能	例
詫び	遺憾の表明	ごめんなさい, ごめん
理由	断りの理由	お金が苦しい, 発表がある
不可	直接的な断り	買えないんです, 買えない

『スピーチ・レベル』は、文体を「デス・マス」体と「ダ」体に分けた。「デス・マス」体は丁寧体に含まれ、話し手が聞き手に直接の敬意を表す形である。一般的には、自分より目上の相手や親疎においては疎の関係にある相手に対して用いられる。「ダ」体は普通体に含まれ、一般的に親しい友人や家族に対して用いる。このふたつの文体を基本とし、それにポライトネス度を表す表現として「ノダ」文を加え、3種類のスピーチ・レベルとした(表2)。

表2 『スピーチ・レベル』の分類

文体	機能	例
ん+です	丁寧さを表す	買えないんです
ん+だ	親近感を表す	買えないんだ
だ	親近感を表す	買えない

『方略』および『スピーチ・レベル』の内容は、以下のとおりである。

まず、『方略』を①〔詫び+理由+不可〕、②〔理由+不可〕、③〔不可〕の3種類とした。これは三大意味公式である〔詫び〕、〔理由〕、〔不可〕とそれらの発現頻度や発現パターンを考慮して決定した。^{5(注)} 3種類の意味公式を使用する断り文①は、三大意味公式の組み合わせである。2種類の意味公式を使用する断り文②は、発現頻度の高い〔理由〕を〔不可〕と組み合わせた。1種類の断り文③は〔不可〕のみとした。これにより、意味公式〔詫び〕のある場合とない場合、意

味公式〔詫び〕および〔理由〕がない場合の好感・不快感をある程度調査できると考えた。

『スピーチ・レベル』は丁寧さとポライトネス度の観点から、「デス・マス」体と「ダ」体にノダ文の会話体である「ん」を組み合わせ、①〔ん+です体〕、②〔ん+だ体〕、③〔だ体〕の3種類に分けた。アンケート調査票に使用する断り文は、このそれぞれ3種類の『方略』×『スピーチ・レベル』で9種類である。次に例を示す。尚、理由は全て「お金が苦しい」で統一している。

- ①「ごめんなさい。今お金が苦しいので、だめなんです」(〔詫び+理由+不可〕×〔ん+です体〕)
- ②「ごめんね。今お金が苦しいので、だめなんだ」(〔詫び+理由+不可〕×〔ん+だ体〕)
- ③「ごめん。今お金が苦しいので、だめ」(〔詫び+理由+不可〕×〔だ体〕)
- ④「今お金が苦しいので、だめなんです。」(〔理由+不可〕×〔ん+です体〕)
- ⑤「今お金が苦しいので、だめなんだ。」(〔理由+不可〕×〔ん+だ体〕)
- ⑥「今お金が苦しいので、だめ。」(〔理由+不可〕×〔だ体〕)
- ⑦「だめなんです。」(〔不可〕×〔ん+です体〕)
- ⑧「だめなんだ。」(〔不可〕×〔ん+だ体〕)
- ⑨「だめ。」(〔不可〕×〔だ体〕)

上記の断り文は、『方略』については①、②、③の文は〔詫び+理由+不可〕、④、⑤、⑥の文は〔理由+不可〕、⑦、⑧、⑨の文は〔不可〕である。また『スピーチ・レベル』については、①、④、⑦の文が〔ん+です体〕、②、⑤、⑧の文が〔ん+だ体〕、③、⑥、⑨の文が〔だ体〕である。実際のアンケート調査票には、調査の意図するところをばかすために①から⑨の断り文を適当に入れ替えたものを使用した。評価基準は、それぞれの断り文に対する好感・不快感を7段階評定で示してもらった。評定は、どちらでもない場合を0とし、好感あるいは不快感を感じる度合いの強弱によってそれぞれ±3まで設定した。内容は、勧誘の場面は①「飲み会(食事会)に誘って断られる(以下、飲み会)」、②「グループ旅行に誘って断られる(以下、グループ旅行)」、依頼の場面は①「ソフトウェアの使い方を教えてほしいと頼んで断られる(以下、ソフトウェア)」、②「文化祭のチケットを買ってほしいと頼んで断られる(以下、チケット)」である。また断る理由は、場面①「飲み会」は「発表がある」、場面②「グループ旅行」は「お金がない」、場面③「ソフトウェア」は「発表がある」、場面④「チケット」は「お金に余裕がない」で統一した(資料2参照)。

3.2 結果

はじめに、勧誘・依頼における2場面の不快感の平均値(勧誘「飲み会」と「グループ旅行」、依頼「ソフトウェア」と「チケット」)を算出した。図1には「後輩」から断られる場合の好感・不快感度を、図2には「親しい友人」から断られる場合の好感・不快感度を示す。尚、図1およ

び2のグラフの数値については資料1を参照されたい。そして、『場面』（「勧誘」、「依頼」）・『対人関係』（「後輩」、「親しい友人」）・『方略』（「詫び+理由+不可」、「理由+不可」、「不可」）・『スピーチ・レベル』（「ん+です体」、「ん+だ体」、「だ体」）に関して、4要因の分散分析をおこなった。結果を表3に示す。

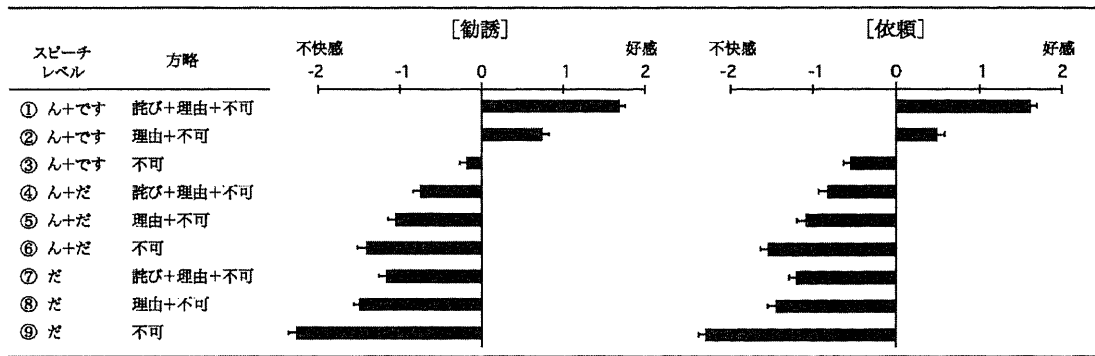


図1 後輩の場合 - 「勧誘」「依頼」の好感・不快感

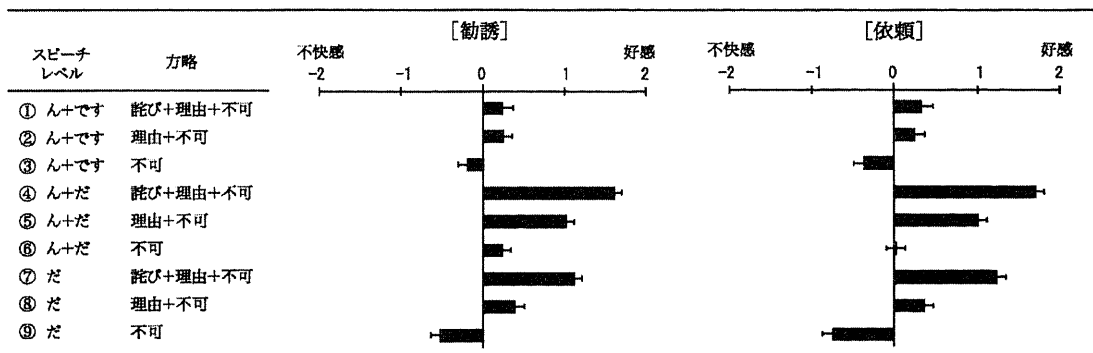


図2 親しい友人の場合 - 「勧誘」「依頼」の好感・不快感

表3 分散分析の結果

要因	自由度	F	p
場面	(1, 155)	3.37	.07
対人関係	(1, 155)	157.94	<.001
方略	(2, 310)	286.40	<.001
スピーチ・レベル	(2, 310)	165.29	<.001
場面×対人関係	(1, 155)	0.08	.77
場面×方略	(2, 310)	6.47	.002
対人関係×方略	(2, 310)	1.14	.32
場面×スピーチ・レベル	(2, 310)	6.57	.002
対人関係×スピーチ・レベル	(2, 310)	279.02	<.001
方略×スピーチ・レベル	(4, 620)	9.88	<.001
場面×対人関係×方略	(2, 310)	3.05	.06
場面×対人関係×スピーチ・レベル	(2, 310)	10.44	<.001
場面×方略×スピーチ・レベル	(4, 620)	0.90	.47
関係×方略×スピーチ・レベル	(4, 620)	99.03	<.001
場面×対人関係×方略×スピーチ・レベル	(4, 620)	0.69	.62

『場面』に関しては、「後輩」(図1)と「親しい友人」(図2)のそれぞれにおける二つの場面のグラフ傾向が一貫していたことを反映して、3次の交互作用は認められなかった。したがって、『場面』による『方略』や『スピーチ・レベル』などの方策は、勧誘であれ、依頼であれ、断られる側から断る側への好感や不快感に実質的にはほとんど影響を与えないものと考えられる。⁶⁽¹¹⁾

『対人関係』に関しては、「後輩」(図1)と「親しい友人」(図2)でグラフ傾向が大きく異なっていたことを反映して、『方略』や『スピーチ・レベル』との間に2次の交互作用が認められた。したがって、『対人関係』によって、『方略』や『スピーチ・レベル』などの方策が異なっていることが示された。そこで、以下では『対人関係』ごとにさらに詳細に分析をおこなった。

a. 「後輩」から断られる場合(図1)

勧誘と依頼の2場面における不快度の平均値を算出し、『方略』と『スピーチ・レベル』を要因とした分散分析をおこなった結果、それぞれの要因の主効果と交互作用が有意であった(方略の主効果 $F(1, 310) = 261.78, p < .001$; 『スピーチ・レベル』の主効果 ($F(1, 310) = 395.78, p < .001$; 交互作用 $F(4, 620) = 63.23, p < .001$)。下位検定としてテューキーの多重比較検定をおこなったところ、⑤ [ん+だ体・理由+不可]と⑦ [だ体・詫び+理由+不可]の間、⑥ [ん+だ体・不可]と⑧ [だ体・理由+不可]の間以外のすべての水準において有意差が認められた ($p < .001$)。「後輩」から断られる場合では、ほとんどの断り文が不快感を示した。好感を示したのは、① [ん+です体・詫び+理由+不可]の断り文、および② [ん+です体・理由+不可]の断り文のみであった。これらの二つの断り文では、いずれも『スピーチ・レベル』における丁寧さ

が共通している。さらに、不快感が高かったのは、「だ体」で断られたときであった。これらのことから、「後輩」という対人関係においては『スピーチ・レベル』が『方略』に優先されると言えるだろう。

b. 「親しい友人」から断られる場合(図2)

勧誘と依頼の2場面における不快度の平均値を算出し、『方略』と『スピーチ・レベル』を要因とした分散分析をおこなった結果、それぞれの要因の主効果と交互作用が有意であった(方略の主効果 $F(1, 310) = 196.31, p < .001$; 『スピーチ・レベル』の主効果($F(1, 310) = 89.13, p < .001$; 交互作用 $F(4, 620) = 16.99, p < .001$)。下位検定としてテューキーの多重比較検定をおこなったところ、①[ん+です体・詫び+理由+不可]と②[ん+です体・理由+不可]・⑥[ん+だ体・不可]・⑧[だ体・理由+不可]の間、②[ん+です体・理由+不可]と⑥[ん+だ体・不可]・⑧[だ体・理由+不可]の間以外のすべての水準において有意差が認められた($p < .001$)。

「親しい友人」から断られる場合では、ほとんどの断り文が好感を示した。特に、④[ん+だ体・詫び+理由+不可]の断り文は高い好感を示した。⑦[だ体・詫び+理由+不可]の断り文と⑤[ん+だ体・理由+不可]の断り文では、詫びの表現が含まれる⑦の方が好感度は高くなった。不快感を示したのは、③[ん+です体・不可]の断り文および⑨[だ体・不可]の断り文である。ともに『方略』が[不可]のみである断り文だが、これに対して『スピーチ・レベル』が[ん+だ体]である断り文(⑥[ん+だ体・不可])は、僅かではあるが好感を示した。これらの結果をまとめると、全体として親しい友人関係においては、『方略』の詫び表現が『スピーチ・レベル』に優先されると考えられる。

3.3 まとめ

本調査の命題について結果を記す。

A 相手に好感を与える方策は、場面(勧誘・依頼)によって変わるのかどうか

場面については、勧誘であっても依頼であっても、ほとんど差は認められなかった。「断り」行為において、『方略』や『スピーチ・レベル』などの方策は、勧誘であれ、依頼であれ、好感や不快感などに影響を与えないということが明らかになった。

B 相手に好感を与える方策は、対人関係によって変わるのかどうか

方策は、対人関係によって変わることが示唆された。

上下関係である「後輩」から断られる場合は、『スピーチ・レベル』が『方略』に優先された。『スピーチ・レベル』が[ん+です体]であれば好感が示されたが、[ん+だ体]や[だ

体]である場合には著しく不快度が高くなった。『方略』に関しては、[詫び] および [理由] が含まれると不快が和らいだが、これらの効果は『文体』の効果に比べて小さかった。

一方、親疎関係である親しい友人から断られる場合は、『方略』の [詫び] および [理由] が欠けていると不快度が高くなった。『スピーチ・レベル』が [ん+です体] である場合も不快度が高くなったが、これは『方略』の効果に比べて小さかった。

これらの結果から、上下関係においては、『スピーチ・レベル』が [ん+です体] であることが決定的な意味を持つことが示された。一方、親疎関係においては『方略』における [詫び] と [理由] が重要であることが示された。

4. 考察と今後の課題

「断り」行為の好感および不快感を決定する要因は、上下関係では『スピーチ・レベル』が、親疎関係では『方略』における [詫び] と [理由] が重要であることが示された。

上下関係において『スピーチ・レベル』が [ん+です体] 以外は全て不快感を示したことは、待遇表現のもつ重要性が改めて示唆されたものといえよう。今回の調査対象者は大学生であるが、彼らの社会環境であるキャンパス内においても「ことばによる規律」が明確に意識化されていることが示されたといえる。一方、親疎関係において『方略』のなかでも [詫び] のある断り文の好感が高かったことは、親しい間柄であっても相手に対して思いやりが求められているということではないだろうか。先行研究においては、断る場合には親しい相手に対しては、謝罪表現を用いない場合が多いという調査結果が出ている(村井1998:217-219)。これは、親しい相手には「謝ることはみずくさい」というような意識があるからだと思われる。しかし今回、調査協力者に別途調査内容について記述をしてもらったところ、謝罪表現を「親しき仲にも礼儀あり」と捉える記述が多く見られ、彼らが謝罪のことばを重要視していることが明らかになった。これは、断る側と断られる側との間にコミュニケーションの齟齬が生じるということを示唆しているのではないだろうか。明らかに、断る側の取る方策が断られる側には通じていないということである。一方 [理由] については、断る側と断られる側との間に齟齬は認められず、双方ともに理由の表明の重要さを認識していることが認められた。

ところで、今回の調査では、親疎関係において『スピーチ・レベル』が [ん+です体] であっても、『方略』が [詫び+理由+不可] および [理由+不可] の断り文の場合、不快感は示されなかった。一般的に考えて、親しい間柄で「デス・マス」体を使用することがあるのかというのはなかなか難しいところである。しかし、例えば片方が浪人をしていた場合など、親しい間柄であっても年齢差があることもあり、年齢差と親しさは必ずしも対立するものではないだろう。ただ、本調査において調査協力者である大学生がそこまで考えて回答してくれたのかは不明であり、この点においては今後の課題としたい。

また、「断り」行為の好感・不快感を決定する要因は、『方略』や『スピーチ・レベル』ばかりでなく、断る本人の持つ雰囲気や態度といった人間性も影響を与えるものと思われる。この点についても将来の課題としたい。

謝辞

本調査を行うにあたり、京都女子大学文学部・湯沢賀幸先生、立教大学コミュニティ福祉学部・川崎晶子先生にご協力をいただきました。統計的手法では、東京大学先端科学技術研究センター・坪見博之氏にご指導いただきました。ここに記して、皆様に深くお礼申し上げます。

注

1 Beeb, L.M., Takahashi, T., and Uliss-Welts, R. (1990) で紹介された。意味公式とは、「断り」の発話行為に用いる詫びや弁明などのことばを意味内容によって分類したもので、実質的な「断り」の伝達機能と方略としての機能をもっている。

2 会話の構造における隣接対の第一部分に対する第二部分になりえるもので、有標性があるとされている応答のことをいう(藤森 1994a)。

3 対人社会的相互作用の中で、「事実上の危害(virtual offense)」との間に生じた不均衡を容認できるような状態に変える作業をいう(Goffman 1971:109)。

4 意味公式には、[詫び] (すみません、ごめんなさいなど)、[理由] (お金がない、時間がないうなど)、[積極的關係維持] (今度絶対行こう、来週なら大丈夫など)、[消極的關係維持] (また今度ね、また誘ってねなど)、[感謝] (ありがとう)、[情報要求] (いつまでですかなど)、[不可] (お断りします、できませんなど)などがあり、これらの意味公式の組み合わせで断り文は成立している。日本人の学生の場合、意味公式で一番多く使われるのは [理由] で、次が [詫び]、続いて [不可] である。意味公式の組み合わせの基本は [詫び] + [理由] で、それに [不可] や [消極的關係維持] など他の意味公式を加えている。たとえば「ごめんね、明日はゼミの発表なの。また今度ね」や「ごめんね、お金がないからだめなんだ」などである。これら意味公式の発現パターンは、上記のものばかりでなく、[理由] + [詫び] + [消極的關係維持] や [不可] + [詫び] + [理由] などさまざまなヴァリエーションがある。また、意味公式の数はだいたい2種類、あるいは3種類で、1種類の意味公式のみの断り文は、[詫び]、[理由]、[不可] が単独で使用されることが多い。

5 発現パターンで頻度が高い断り文は、3種類の発現パターンでは [詫び] + [理由] + [不可]、2種類の発現パターンでは [詫び] + [理由] および [理由] + [不可]、1種類の発現パターンでは [理由] あるいは [不可] であった(村井1998)。

6 『場面』といくつかの要因において、1次あるいは2次の交互作用が認められたが、それらで見られた差は、いくつかの水準において不快感が0.2程度異なることを反映した結果であった。このような小さな差は、スピーチ・レベルや方略、対人関係の各水準において見られた差と比較して非常に微細であったため、実質的な差があるとは見なさなかった。本調査では、非常に多くのデータセット (N =96) を対象に分析をおこなったため、このような微細な差に関しても統計的

な有意差が認められたと考えられる。

参考文献

- 生駒知子・志村明彦. 1993. 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー 「断り」という発話行為について」 『日本語教育』 79号、日本語教育学会、41-52ページ。
- 藤森弘子. 1994a. 「日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー」 1993年度大阪大学大学院言語文化研究科修士論文、3月。
- 藤森弘子. 1994b. 「日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー - 『断り』行為の場合」 『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』 第1号、1-19ページ。
- 藤森弘子. 1996. 「関係修復の観点からみた「断り」の意味内容 - 日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較 -」 『大阪大学言語文化学』 Vol.5、4-17ページ。
- 元智恩. 2003. 「断りとして用いられた「ノダ」- ポライトネスの観点から」 『計量国語学』 第24巻 第1号、1-18ページ。
- 母育新. 2002. 「ポジティブ・ポライトネスからみた日中の比較 - 日本語教育の視点からの考察-」 『麗沢学際ジャーナル』 10(1) 12月、75-85ページ。
- 村井卷子. 1998. 「『断り』行為の日独比較 - 詫び表現、共感表現を中心に -」 『筑波大学地域研究』 第16号、3月、199-226ページ。
- 村井卷子. 2001. 「受け手が文体表現から受ける不愉快度 - 「断り」行為の場合 -」 『第8回社会科学大会大会予稿集』、9月、249-254ページ。
- 村井卷子. 2004. 「「断り」行為において受け手が感じる不愉快度は何に起因するのか - 親しい友人に対する場合 -」 『第14回社会科学大会大会予稿集』、192-195ページ。
- 村井卷子. 2005. 「「断り」行為において好感度と不快度を決定する要因は何か - 『文体』と『方略』の二つの観点から -」 『第16回社会科学大会大会予稿集』、9月、136-139ページ。
- Beeb, L.M., Takahashi, T., and Uliss-Welts, R. 1990. "Pragmatic Transfer in ESL Refusals" In R.C. Scarcella, E. Anderson and S.C. Krashen (eds.) *On the development of communicative competence in a second language*, New York ; Newbury House.
- Brown, P. and S. D. Levinson, S. 1987. *Politeness, Some Universal in Language Usage*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Goffman, E. 1971. *Relations in Public*, New York : Harper & Row.

資料1. 「対人関係」と「場面」ごとの好感度と不快感（図1と図2のグラフの数値化）

スピーチ レベル	方略	好感 (+) ・ 不快感 (-)			
		後輩 (図1)		親しい友人 (図2)	
		勧誘	依頼	勧誘	依頼
ん+です	詫び+理由+不可	1.7	1.5	0.2	0.3
ん+です	理由+不可	0.7	0.5	0.2	0.2
ん+です	不可	-0.2	-0.5	-0.2	-0.3
ん+だ	詫び+理由+不可	-0.7	-0.8	1.6	1.6
ん+だ	理由+不可	-1	-1	1	1
ん+だ	不可	-1.4	-1.5	0.2	0
だ	詫び+理由+不可	-1.2	-1.1	1.1	1.2
だ	理由+不可	-1.5	-1.4	0.4	0.3
だ	不可	-2.3	-2.2	-0.5	-0.7

資料2. アンケート調査票 (設問)

I. 飲み会(食事会)に誘う

あなた：「来週飲み会(食事会)するんだけど、来ない？」

後輩あるいは親しい友人：

- ①「ごめんなさい。発表あるから行けないんです。」
- ⑨「行けない。」
- ⑥「発表あるから行けない。」
- ④「発表あるから行けないんです。」
- ⑧「行けないんだ。」
- ②「ごめんね。発表あるから行けないんだ。」
- ③「ごめん。発表あるから行けない。」
- ⑤「発表あるから行けないんだ。」
- ⑦「行けないんです。」

II. グループ旅行に誘う

あなた：「冬休みにグループ旅行しようと思っているんだけど、参加しない？」

後輩あるいは親しい友人：

- ①「ごめんなさい。今お金が苦しいので、だめなんです。」
- ⑨「だめ。」
- ⑥「今お金が苦しいので、だめ。」
- ④「今お金が苦しいので、だめなんです。」
- ⑧「だめなんだ。」
- ②「ごめんね。今お金が苦しいので、だめなんだ。」

- ③「ごめん。今お金が苦しいので、だめ。」
- ⑤「今お金が苦しいので、だめなんだ。」
- ⑦「だめなんです。」

Ⅲ. ソフトウェアの使い方を教えてほしいと頼む

あなた：「新しいソフトの使い方教えてほしいんだけど、時間ないかな？」

後輩あるいは親しい友人：

- ①「ごめんなさい。授業の発表があって、忙しいんです。」
- ⑨「忙しい。」
- ⑥「授業の発表があって、忙しい。」
- ④「授業の発表があって、忙しいんです。」
- ⑧「忙しいんだ。」
- ②「ごめんね。授業の発表があって、忙しいんだ。」
- ③「ごめん。授業の発表があって、忙しい。」
- ⑤「授業の発表があって、忙しいんだ。」
- ⑦「忙しいんです。」

Ⅳ. 文化祭の模擬店のチケットを買ってもらう

あなた：「模擬店のチケット買ってほしいんだけど、どう？」

後輩あるいは親しい友人：

- ①「ごめんなさい。今お金に余裕がなくて買えないんです。」
- ⑨「買えない。」
- ⑥「今お金に余裕がなくて買えない。」
- ④「今お金に余裕がなくて買えないんです。」
- ⑧「買えないんだ。」
- ②「ごめんね。今お金に余裕がなくて買えないんだ。」
- ③「ごめん。今お金に余裕がなくて買えない。」
- ⑤「今お金に余裕がなくて買えないんだ。」
- ⑦「買えないんです。」

